九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

方言意識と方言使用の世代差

陣内, 正敬

https://doi.org/10.15017/2332635

出版情報：文學研究. 82, pp.123-145, 1985-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

方言意識と方言使用の世代差

陣　内　正　敬

0. はじめに

福岡市近郊における方言使用の実態を明らかにする目的で，昭和59年8月方言臨地調査を行った。今回の調査のひとつの目的は，一昨年行った福岡市全域での若年層の言語調査（九大文学部言語研究室　1983）に対し，地域を限定して，言語使用の世代差を明らかにすることであった。またもうひとつの目的は，方言話者の，ある語彙に対する方言意識あるいは標準語意識の程度，ならびにその意識とその語彙の使用との関係についてであった。方言が共通語化する場合には，必ず在来の方言語彙と共通語語彙との競合状態が出現する。この両者は当の方言話者にとってどう意識され（評価され），どう運用されているか。この小論はこうした問題意識に沿った調査の報告と若干の考察からなる。

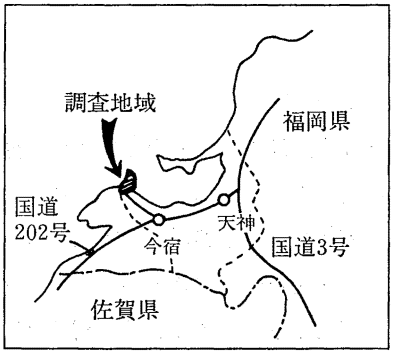
今回の調査でインフォーマントとして情報を提供して下さった方々，またインフォーマントの方々との仲介の労を惜しまれなかった北崎中学校の宮内先生に対し，心からお礼を申し上げる。

なおこの調査は昭和59年度文部省科学研究費補助金，奨励研究(A)「都市化と方言（福岡市及びその近郊地域）」により行われた。調査の詳細については『科学研究費報告書（研究代表者陣内正敬)』(1985) を参照されたい。

また以下の報告において，「標準語」，「共通語」，「共通語化」などの用語が出て来るが，後の2つは特に断わらない限りそれぞれ「全国共通語」，「全国共通語化」のことであり，「標準語」は実質的には「全国共通語」と同じものを指すと考えてよいが，方言話者の意識のレベルを論じる際には「標準語」の方を用いることにする。

I. 調査の概要

1. 調査地域　福岡市西区大字西ノ浦，宮浦，唐泊，草場などを含む北崎中学校の校区。昭和36年福岡市に合併されるまでは糸島郡志摩町。福岡市の西北端に位置し，人口は4000人程で，漁業と農業が主な産業である。交通面では道路はよく整備されているが，福岡市の中心部（天神）まではバスで1時間程かかる。日常の生活圏は国道202号線の今宿あたりまでである。



この地区を選定した理由としては，一昨年の市内各地の中学生へのアンケート調査（前述）の際に知られていたことだが，i）人口移動が少なくかなり純粋な形でその土地方言の変容状況が観察できる。ii）福岡市近郊の地域の中でもまだ方言色の強い地域で，これも世代差など把えるのに都合が良い。特に［kar̲ara］‘体’などの方言音は特徴的である（この r̲ については陣内 1985 参照）。iii）その他諸般の事情による。

2. インフォーマント　インフォーマントはいずれもこの土地の生え抜きであるが，その人数を年令層，性別ごとにまとめたのが下の表である。年令層は便宜上3つに分けており，それぞれ〝老年層〟（60歳以上），〝中年層〟（30歳～59歳），〝若年層〟（29歳以下）と名づけた。なお若年層はほとんど中学生，高校生（12歳～17歳）であり，中年層も実際は40歳以上がほとんどであるため，20代，30代のデータはないと考えた方が良い。

	若年層	中年層	老年層	計
男	10人	5人	5人	20人
女	8人	7人	4人	19人
計	18人	12人	9人	39人

3．調査方法　北崎中学校の先生に訪問先との連絡を全てお頼みし，毎日午後7時～9時にかけてインフォーマント宅へお伺いした。調査時間は一人ほぼ40分。はじめに調査の目的を簡単に説明し，その後音韻，語彙，そして最後にインフォーマントの属性，履歴などを質問した。調査員は毎回3～4名。1軒につきインフォーマント2～3名を別々の部屋で同時に面接調査した。録音は最初から最後まで連続して取った。

なお今回の調査に参加した調査員は，筆者の他，尾形佳助，木戸光子，木村美由紀，久保智之，福井康子，渡辺秀治の諸氏でいずれも言語学研究室のメンバーである。

4．調査項目　この小論で扱う語彙的側面のみについて簡単に紹介しておく。

調査語彙選定の基準は，その語彙についての方言意識なり標準語意識の揺れが大きいと予想されたものである。この意識の曖昧さの出て来る要因としては，次の3つのことが考えられる。

1）方言と共通語の間の語彙（語形）そのものの違いではなく，同一語彙の意味領域の差異から来るもの。例えば本調査では，「なおす」と「来る」を取り挙げたが，当方言と共通語との意味領域の差異（「なおす」については調査カードの例文として挙げた範囲での）を模式的に書けば次のようになる。

「なおす」

	共通語	当方言
（修理）	なおす	なおす
（収納）	しまう	

「来る」

	共通語	当方言
（往）	行　く	行　く
（来）	来　る	来　る

なお説明の都合上，当方言の「なおす」を，（修理）に相当する部分は「なおす1」に，（収納）に相当する部分は「なおす2」とする。

2) 方言の中での尊敬表現にみられるもので，非常に改たまった場面で用いられていることから来るもの。本調査では〝存在〟の尊敬表現「おられます※か」と「おってありますか」。これは全国共通語の「いらっしゃいますか」にほぼ相当する。

3) 「新方言」と思われるものの中には，若年層のことばが共通語化しているという一般的な前提があるために方言色の意識されないものがある。ここで取り挙げた「変ない」はごく新しい語形で，10代か20代でしか使われないものである。これは全国共通語の「変」に当る。また広域方言の「変や」も同時に調査した。

なお以下<なおす1／なおす2／しまう>，<来る／行く>，<おられますか／おってありますか／いらっしゃいますか>，<変ない／変や／変>などセットにして調査した単位を〝項目〟と呼び，各項目の中の個々の語形を〝語彙〟と呼ぶ。従って今回の調査項目は4つ，調査語彙は11ケである。

II. 集計結果・考察

データの集計・統計処理などは，九州大学大型計算機センターで利用できる統計処理パッケージ ANALYST を使用したが，その際素データに若干の変数変換を行いデータ構造を幾分簡略化した。それらは，「使用欄」の○，×，⊗の3値の選択を，使用するか否かの2値にしたことと，「評価欄」の5段階評価について，1，2を方言，4，5を標準語，3を DK の3段階にしたことなどである（付録「調査票」1を参照)。なお ANALYST の使用法について大型計算機センター開発部の石氷結花氏にいろいろお手数をかけた。

以下，前節で紹介した順序で各項目を取り挙げてゆく。

1) <なおす2／しまう>，<来る／行く>

◎ 調査例文

{ 涼しくなったので扇風機を押入れになおした。
{ 涼しくなったので扇風機を押入れにしまった。

（電話にて）
「今からこっちに遊びに来ない」
{ 「うん，すぐ来る」
{ 「うん，すぐ行く」

各語彙ごとに年齢層別集計をしたのが下の表である。

表1a.　言語使用の年令層別集計（%）

使　用	若年層		中年層		老年層	
	使う	使わない	使う	使わない	使う	使わない
なおす2	94.4	5.6	91.7	8.3	100.0	0.0
しまう	22.2	77.8	25.0	75.0	25.0	75.0
来る	66.7	33.3	91.7	8.3	87.5	12.5
行く	88.9	11.1	50.0	50.0	12.5	87.5

表1b.　言語評価の年令層別集計（%）

評　価	若年層			中年層			老年層		
	方	標	DK	方	標	DK	方	標	DK
なおす2	50.0	33.3	16.7	25.0	50.0	25.0	50.0	25.0	25.0
しまう	27.8	72.2	0.0	33.3	58.4	8.3	25.0	50.0	25.0
来る	66.7	33.3	0.0	66.7	25.0	8.3	75.0	25.0	0.0
行く	33.3	60.7	0.0	0.0	91.7	8.3	25.0	62.5	12.5

表 1a の単純集計では不明な，方言／共通語の二重方言話者の割合もわかる

ようにし，また表 1b の言語評価を〝正解率〟に換算した図を下に示す。〝正解〟とは，「なおす2」あるいは「来る」に対し〝方言〟，「しまう」あるいは「行く」に対し，〝標準語〟と反応したものを言い，その他の反応は間違いとなる。

図1a. 使　　用　　率

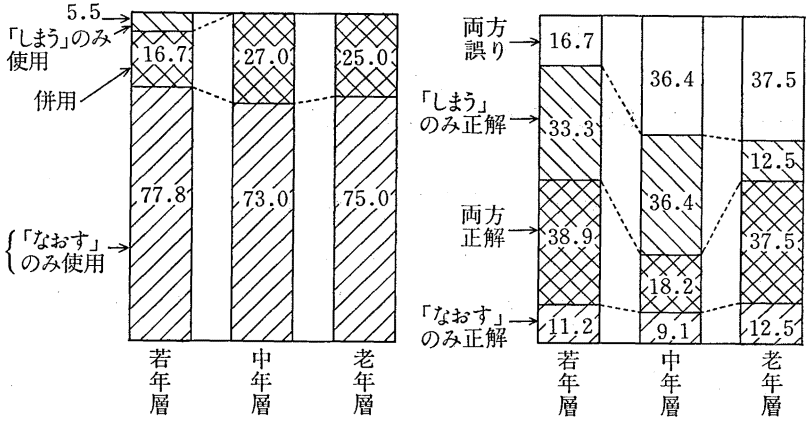
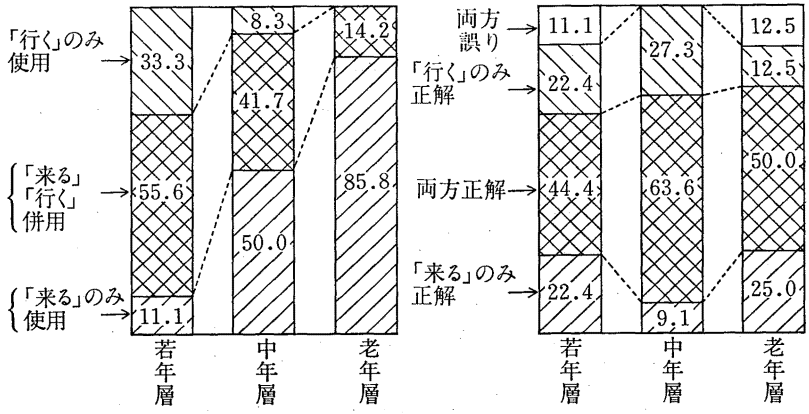


図1b. 正　　解　　率



使用率の面ではこの両者は対照的な傾向を示している。＜なおす2／しまう＞についてはどの年齢層でも「なおす2」が根強く使われているのに対し，＜来る／行く＞では明瞭な世代差が出ており，若い世代程「来る」，「行く」の併用が増え，若年層では実質上「行く」の使用率が「来る」を上回っている。つまり「来る」の衰退するスピードよりも「行く」の浸透するスピードの方がはるかに速い。一方正解率の面でも両者はかなり異なっており，＜なおす2／しまう＞の方は正解率と誤答率の割合がほぼ等しく，どの世代でもかなり混乱した様相を呈している。特に「なおす2」の標準語意識が目立つ。逆に＜来る／行く＞の方はかなり正しく評価されており，特に中年層で正解率が高い。これに関しては，「来る」と「行く」併用の中年層の中に，後者をより改たまった場面で使うという報告の多かたことを想い出す。つまり文体的差異を生じて共存しているということである。また若年層でもこの種の報告はあったが，中年層程には正解率が高くないところからみて徐々にではあるが，概念的意味（conceptual meaning）（Leech 1974）での意味領域の変更が進行しつつあるのかも知れない。

以上のことを「意識」と「使用」の関連でまとめると，＜なおす2／しまう＞では，「なおす2」の標準語意識が高く＜日常の使用語彙として機能しているのに対し，「しまう」は理解語彙としての標準語に留っている。＜来る／行く＞の方では標準語と意識されている語彙（「行く」）の方が優勢になりつつある。

2) ＜おられますか／おってありますか／いらっしゃいますか＞

◎ 調査例文

（校長先生宅への電話にて）

「もしもし，校長先生おられますか」
「　〃　〃　おってありますか」
「　〃　〃　いらっしゃいますか」

1)と同様な方法で表 2a, b と図 2a, b を作った。

表2a. 言語使用の年令別集計 (%)

使　用	若年層		中年層		老年層	
	使う	使わない	使う	使わない	使う	使わない
おられますか	83.3	16.7	91.7	8.3	100.0	0.0
おってありますか	0.0	100.0	66.7	33.3	50.0	50.0
いらっしゃいますか	61.1	38.9	58.3	41.7	62.5	37.5

図2 a. 使用率

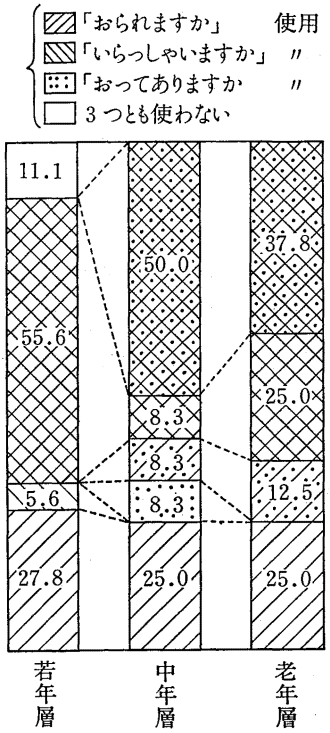


図2 b. 正解率

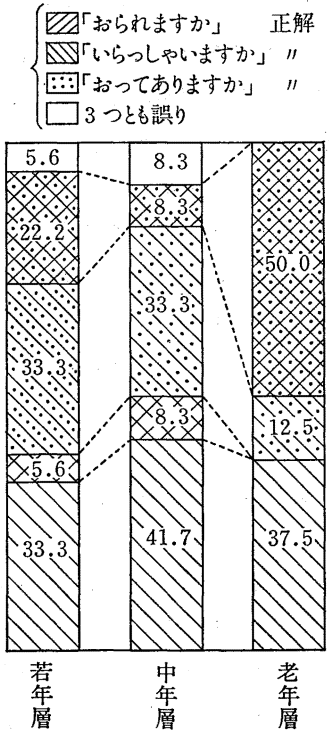


表2b. 言語評価の年令別集計（%）

評価	若年層			中年層			老年層		
	方	標	DK	方	標	DK	方	標	DK
おられますか	27.8	72.2	0.0	16.7	66.6	16.7	50.0	50.0	0.0
おってありますか	55.6	33.3	11.1	41.7	41.7	16.7	62.5	38.5	0.0
いらっしゃいますか	0.0	94.4	5.6	0.0	91.7	8.3	0.0	100.0	0.0

使用率の面では，若と中・老年層の間に質的な差異がみられる。これは「おってありますか」が若年層で全く使われなくなったことから来ている。「おられますか」は全世代を通じて不動の地位を保っており，「いらっしゃいますか」よりも身近な日常語として機能している。この両者については，インフォーマントの報告からも，あるいは男女別集計からみても（「おられますか」は男女差なし。「いらっしゃいますか」の方は女性の使用する割合が男性の2倍）「いらっしゃいますか」の方がより丁寧なあるいは丁寧すぎる標準語として意識されているようだ。この両者の関係と，1)「なおす2」と「しまう」のそれには共通点があり，それは標準語とみなされている方言形（地域共通語）は新たに這入って来る純正の標準語語彙に対し強い抵抗力を持っているといえる。

3) ＜変ない／変や／変＞

◎ 調査例文

（腐りかけたケーキを食べた時などに）

「このケーキの味，どうも変ないね」
「　〃　　〃　変やね」
「　〃　　〃　変（だ）ね」

1)，2)と同様に表3，図3を作った。

表3a.　言語使用の年令別集計（%）

使　用	若　年　層		中　年　層		老　年　層	
	使　う	使わない	使　う	使わない	使　う	使わない
変ない	50.0	50.0	8.3	91.7	0.0	100.0
変　や	50.0	50.0	50.0	50.0	87.5	12.5
変	11.1	88.9	25.0	75.0	37.5	62.5

図3a.　使　用　率

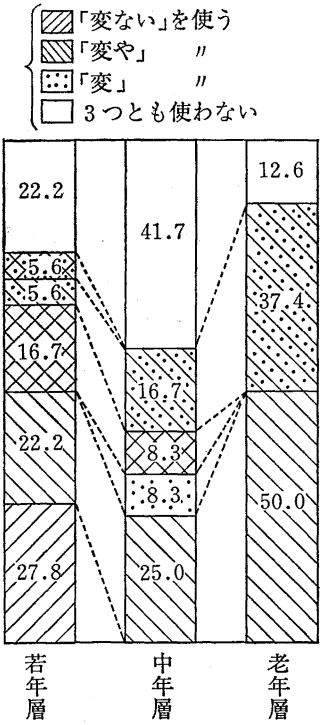


図3b.　正　解　率

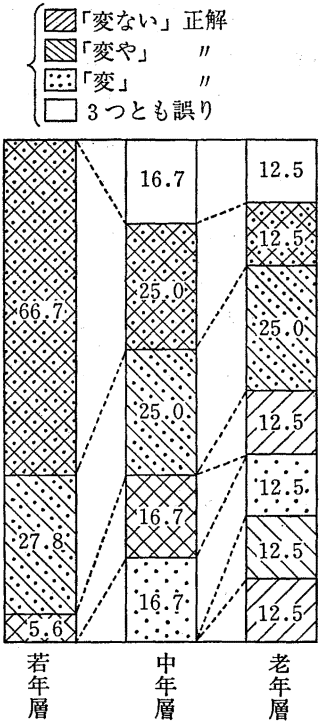


表3b. 言語評価の年令別集計（%）

評価	若年層			中年層			老年層		
	方	標	DK	方	標	DK	方	標	DK
変ない	72.2	22.2	5.6	41.7	8.3	50.0	37.5	12.5	50.0
変や	100.0	0.0	0.0	50.0	33.3	16.7	50.0	37.5	12.5
変	5.6	94.4	0.0	0.0	83.3	16.7	25.0	62.5	12.5

「変ない」という新語形の出現が若年層と中・老年層を分けているが，表3bを見ると，中・老年層においてはDKが最も多いことからこの語彙に多少とまどっている感がある。それでも各世代通じて方言意識の方が標準語意識よりも圧倒的に高いことから「変ない」は〝新方言〟と見なして良いだろう。また図3a, bから，若年層ではこの語彙を方言と知りつつ使っており（「変や」も同様），「変」は余りに標準語すぎると感じられているためほとんど使用されない。これには中年層がよく使う「変なか」という方言語彙が関っており，「変なか」程方言色が濃厚でなく，「変」程標準語色のない両者の中間形が最も好まれているのである。因みに「変」を使うのは，男女別集計によると各世代通じて女性のみである。なお「変なか」は明らかに方言とわかる語形であるため今回の調査には含めなかった。

この項目では，方言語彙の代わりに標準語語彙という単純な置き換えが行われるのではなく，新方言形ないし広域方言形の方を好む傾向が現れている。

以上の4項目から考えられることは，世代的差異からみて，標準語と意識されている方言（地域共通語）は純正標準語よりも身近なものとして大いに用いられるであろうし，（「なおす」，「おられますか」）若年層に方言と意識されている語彙は，それが共通語との2項対立的な場合には衰退する傾向にあり（「来る」），3項対立的な場合には最も方言色の強い語形は衰退し（「おってありますか」，「変なか」），純正標準語との中間形（「おられますか」，「変ない」や「変や」）が好まれるというような見方ができないだろうかと考える。

ここまで項目別に扱って来たわけであるが，個々の語彙，個々の項目をまとめて扱い，総合的見地から語彙相互の関係や，インフォーマント同志の相互関係をみてみよう。これには林の数量化理論が有効である。数量化Ⅲ類によってパターン分類すると図4a・図4b のようになった。この図はそれぞれ言語使用，言語評価についてのサンプルスコアのプロット図―インフォーマント相互の位置関係を示してくれる―である。なおこれまでは項目中心に論じて来たので，以下ではインフォーマント中心に話を進める（カデコリウェイトのプロット図は省略するが必要な時には言及する)。サンプルスコアの プロット図をみる際の参考として，各インフォーマントがどの番号を割り当てられているかを世代別，男女別に挙げておく（詳しくは付録の〝インプット素データ〟を参照)。

	男　性	女　性
老 年 層	00～03	04～07
中 年 層	08～12	13～19
若 年 層	20～29	30～37

図 4a の第1軸は〝言語使用上の年齢差〟を表しているようである。カテゴリウェイトのプロット図（省略）をみると，下の方（負のウェイト）に「変ない」,「行く」などが，上の方（正にウェイト）に「おってありますか」,「変」などが配置されており，これと図 4a の下方には若年層が集まり，上方には中・老年層が集まっていることなどからわかる。第2軸は〝方言をよく使うか否かという意味での言語使用の差〟を表しているようである。カテゴリウェイトのプロット図では左側（負のウェイト）に「おられますか」,「おってありますか」など，右の方（正のウェイト）に「変」,「しまう」などが現れていることから，負の方向が〝方言使用的〟，正の方向が〝非方言使用的〟なものを表しているようである（これら軸の意味については，付録の素データにおける各インフォーマントの反応パタンを 参照するとなお一層明らかになる)。また第2

軸は同時に中・老年層の〝男女差〟も表しているようであり（図3a で ＊ の付してあるのが中・老年層の男性），男性は〝方言使用的〟，女性は〝非方言使用的〟となりそうである。明瞭なグループ分けはできないが，点線で囲んだあたりがそれぞれ(1)中・老年層男性，(2) 中・老年層女性，(3) 若年層の典型的な位置を表しているのではないだろうか。

図4a. 言語使用の数量化Ⅲ類

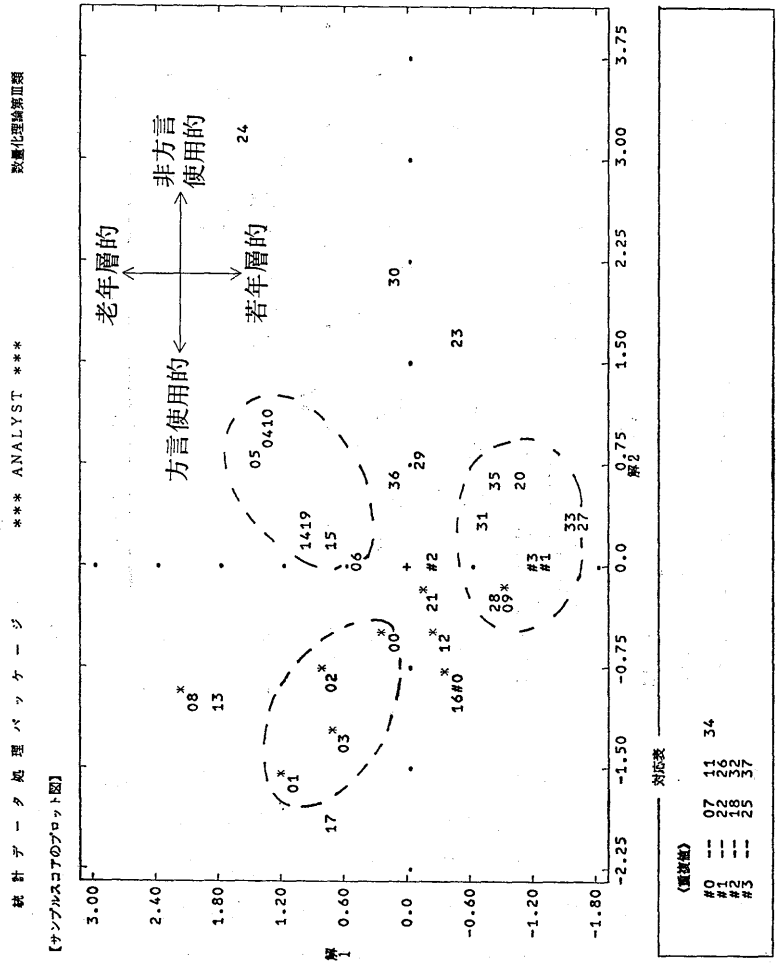


図 4 b.　言語評価の数量化Ⅲ類

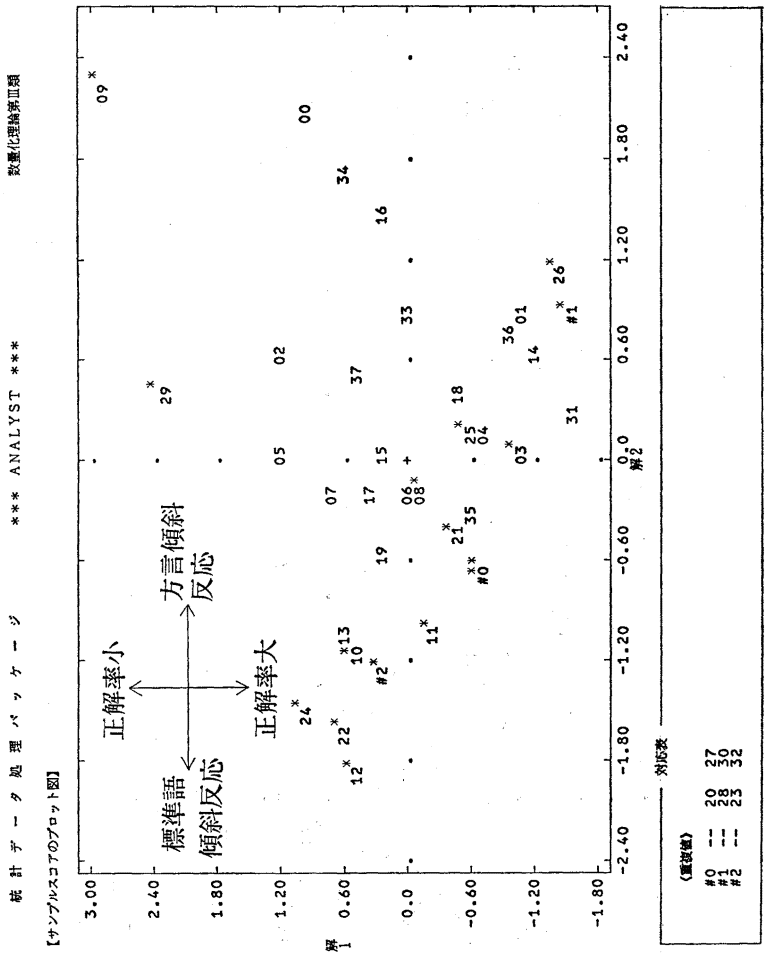


図 4b は言語評価に関するものだが，第 1 軸は〝言語評価の良し悪し（正解率の多少）〟，第 2 軸は〝方言傾斜反応〟か〝標準語傾斜反応〟を表しているようである。つまり，もし調査語彙全てに対し「方言」と反応した場合には正の大きな値を，逆に全て「標準語」と反応した場合には負の大きな値を取ることになる。この言語評価については言語使用のような明瞭な世代差はみられず，

若年層の評価が若干良いといった程度である。これは予想に反したことであったが，中・老年層においては共通語を知らないから使わないということではなく，知識は若年層と同じくらい持っていてもそれを運用する場面が少ないということかも知れない。第2軸でも世代差は全く見られないが男女差を多少反映している。つまり老年層を除いて，負の方に男性，正の方に女性の現れる傾向が見て取れる（図 4b で*の付してあるのが若・中年層の男性）。老年層にあっては「自分たちの普段使っていることばは方言」という無条件の前提が一般にあるため，どちらかと言えば〝方言傾斜反応〟を示すものと思われる。

ここで図 4a と図 4b を重ね合わせ，言語評価の良し悪し，方言傾斜反応か否かの反応パターン，実際の言語使用の3者の間の関係を，年齢層別，男女別にタイプ分けすればおおよそ次のようになるであろうが．中・老年層はサンプルが特に少なく，この分類はひとつの試みということで提示するに留めておく。

年令層	性	評価	反応パターン	使用
老年層	男	並	方言傾斜的	方言的
	女		並	やや非方言的
中年層	男	並	標準語傾斜的	方言的
	女		方言傾斜的	やや非方言的
若年層	男	やや良	標準語傾斜的	非方言的
	女		方言傾斜的	

〝並〟とはプロット図の軸付近に分布するということで，このデータの中での平均的な値を示し偏りのないことである。評価欄の〝並〟は正解率にして65％（11問中7問正解）あたりである。

III. おわりに

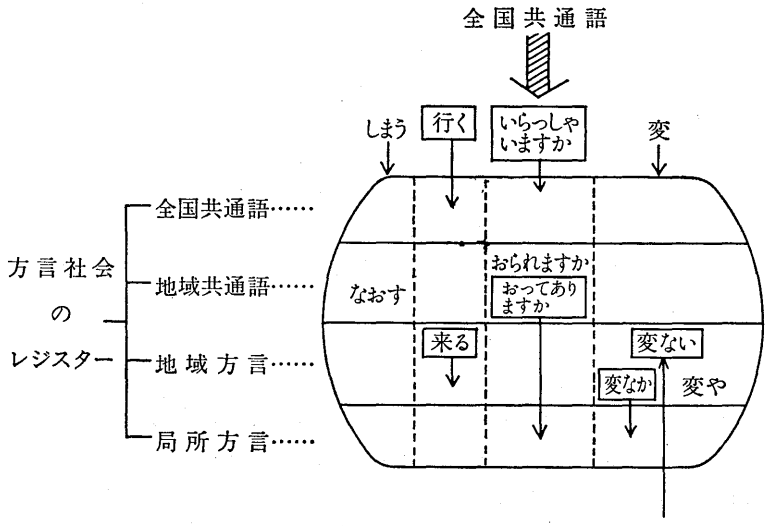
方言社会には文体的意味の異なる様々のレジスター（Hymes 1974）が存在

するが，ここで今回の調査語彙のそれぞれが，このレジスターのどこら辺りに位置しているのかを整理しておく。そこでまず「評価」と「使用」の面から，この方言社会のもつレジスターを次の表のように設定しておく。表中の〝絶対的評価〟とは客観的にみた方言語彙と標準語語彙の違いであり，逆に〝相対的評価〟とは，方言話者の主観的判断によるものである。〝使用率〟の大小はその方言社会全体としてみて，その語彙がよく使われるか否かを表す。

レジスター	絶対的評価	相対的評価	使用率
全国共通語	標準語	標準語	大／小
地域共通語	方言	標準語	大
地域方言	方言	方言	大
局所方言	方言	方言	小

今回取り挙げた語彙は，いずれもまだ「方言」の烙印を押されてないと予想したものであり，現に「なおす」，「来る」，「おられますか」などは，他の方言圏からの転居者がしばしば耳にし，奇異に感じたりまた誤解さえ生じることのあるものである。上の表でいえば〝地域共通語〟に相当するとみなされて来た語彙が，現在どのような状況にあるかを知りたいという問題意識からの語彙選定であった。

〝全国共通語〟の浸透によってこれらの語彙がどのように変わっているか，あるいは変わってないかを模式的に描けば次のようになろう。□で囲んだ語彙は何らかの変化がみられたものであり，矢印の長さは変化の大きさを表すものとする。「行く」，「変ない」は若年層の中で完全な市民権を得た感があり，「いらっしゃいますか」は前二者とは程遠いが女性の間で聞かれるようになった。一方「しまう」，「変」はまだこの方言社会の一員とは言えないようである。



引用文献

九大言語学研究室　1983『九大言語学研究室報告別冊—福岡市若年層のことば—』

陣内正敬　1985『文部省科学研究費報告書　都市化と方言（福岡市及びその近郊地域）』

福岡市立北崎小学校　1980『北崎小学校百年誌』葦書房

Hymes, Dell.　1974 Foundations in Sociolinguistics. University of Pennsylvania Press.

Leech, G.　1974 Semantics. Penguin Books.

なお「調査票２」については次も参考にした。

篭山　京　1981『大都市における人間構造』東京大学出版会

Sommaire

Kitazaki est un village situé aux environs de Fukuoka, ville noyau dans laquelle la standarisation linguistique avance très rapidement. Pour déterminer l'état dialectal actuel de cette

communauté, une enquête a eu lieu sur place ; son but concret est de mettre en évidence des differences entre les groupes d'âge du point de vue de l'emploi des mots mais aussi de la conscience dialectale de ces mots. Les résultats ont montré qu'en ce qui concerne l'emploi des mots on observe un net contraste, mais pour ce qui est de la conscience, les trois groupes d'âge sont semblables. Cela signifie que malgré que les groupes d'âge élevé soient capables de differencier les mots dialectaux de ceux standards, ils n'emploient pas ces derniers.

※ 本稿では，この「おられますか」を（地域）方言として取り扱ったが，脱稿後，大野透氏よりこの表現は標準語的ではないだろうかという御指摘を受け，その後福岡在住の東京出身の方々に尋ねたり関連する文献に当ってみたりしたが確固としたことは不明なままである。東京方言の話者においては使用頻度が低く，従って意識も不明か方言的という反応が多かったが，社内敬語としては東京でもよく使われているようである（『企業の中の敬語』1982国立国語研究所）。地方出身者によるものかも知れない。また九州では学校教育において，〝「おられますか」は本当の標準語ではないから「いらっしゃいますか」を使うように〟という指導がなされていることをよく耳にする。

この点に関しては御教示頂ければ幸いである。

付　　録

「調査カード」

1. a．扇風機がこわれていたのでなおした。
   b．涼しくなったので，扇風機を押入れになおした。

2. （電話にて）
   A さん：「いまからこっちに遊びに来ない。」
   B さん：「うん，すぐ来る。」

3. （校長先生宅への電話にて）
   a．「もしもし，校長先生おられますか。」
   b．「もしもし，校長先生おってありますか。」

4. （腐りかけているケーキを食べた時などに）
   a．「このケーキ，どうも変ないね。」
   b．「このケーキ，どうも変やね。」

※調査カード，調査票とも調査員が読み，記録した。調査カードに全国共通語語彙が挙げてないのは，インフォーマントに最初から察知されることを恐れたためである。

「調査票」　1

項　　目	使　　用	評　　価
1a．なおす　1		1　2　3　4　5
1b．なおす　2		1　2　3　4　5
1c．しまう		1　2　3　4　5
2a．来　る		1　2　3　4　5
2b．行　く		1　2　3　4　5
3a．おられますか		1　2　3　4　5
3b．おってありますか		1　2　3　4　5
3c．いらっしゃいますか		1　2　3　4　5
4a．変ないね		1　2　3　4　5
4b．変やね		1　2　3　4　5
4c．変　ね		1　2　3　4　5

〈凡　例〉

使　用
- ○　使　う
- ×　使わない
- ⊗　使わないが知っている

評　価
- 1　方　言
- 2　どちらかといえば方言
- 3　わからない
- 4　どちらかといえば標準語
- 5　標準語

「調査票」2

調査者＿＿＿＿＿＿＿＿

日付　　月　　日　　時

1．お名前＿＿＿＿＿＿＿＿　2．お年 満　　歳　3．性別 男　女

4．現住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

転居の経験＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

次の5～9までの質問では，当てはまるものを選び，その番号を○で囲んで下さい。

5．a．1日に新聞をお読みになる時間。

1．～15分　2．15～30分　3．30分～1時間
4．1時間～　5．読まない

b．1日にテレビ，ラジオをご覧になったり，お聞きになったりする時間。

1．～1時間　2．1～2時間　3．2～3時間
4．3時間～　5．見ない・聞かない

6．現在生活していらっしゃるこの地域について，どう感じておられますか。

1．好きである　2．どちらかといえば好きである
3．どちらかといえばきらいである　4．きらいである
5．なんともいえない

7．この地域で話されていることば(方言)について，どう感じておられますか。

1．好きである　2．どちらかといえば好きである
3．どちらかといえばきらいである　4．きらいである
5．なんともいえない

8．現在おつきになっているお仕事（職業）はなんでしょうか。

1．専門技術的職業（教員，医師など）　2．管理的職業（課長以上の管理職など）　3．事務的職業（係長以下の事務職）　4．商工自営（小売店などの店主）　5．販売的職業（セールスマン・店員）
6．労務的職業A（職人や役付工員など）　7．労務的職業B（一般の工員・自動車運転手など）　8．労務的職業C（業務員・土建労務者など）　9．農林漁業　P．分類できない（具体的に＿＿＿＿＿）
10．学校卒業後就職していたことがない

9．最後にご卒業になった学校はどれでしょうか。

1．まったく学校へは行かなかった　2．小学校・国民学校
3．（旧制）高等小学校・新制中学校　4．（旧制）中学校・商業・工業・(新制）高等学校　5．（旧制）高校・専門学校・師範学校・(新制）短期大学・高専　6．（旧制）大学・(新制）大学　P．分類ができない（具体的に＿＿＿＿＿）　7．現在在学中

「インプット素データ」

＊ 言語使用
＊＊ 〃 意識

	調査票 2	調査票 1	
00010	AUHA 73 O M A O 1 2 1 1 8 2	2 2 0 2 1 2 1 2 1 2 1	＊
00020		1 1 5 1 3 5 5 5 1 5 1	＊＊
00030	NYOS 77 O M M O 1 2 1 1 7 3	1 2 1 2 1 2 2 1 1 2 1	
00040		3 1 5 1 4 1 1 5 3 1 5	
00050	OYOS 77 O M H 1 3 2 1 2 1 5	2 2 1 2 1 2 2 2 0 2 1	
00060		1 1 3 2 5 4 4 5 3 3 3	
00070	SUEM 75 O M I O 3 2 1 9 8 3	1 2 0 2 1 2 1 2 1 2 1	
00080		5 1 5 1 5 2 1 5 3 2 5	
00090	OSUM 71 O F H O 3 2 1 2 0 4	2 2 2 2 2 2 2 2 1 2 2	
00100		2 3 1 1 5 2 2 4 1 1 5	
00110	IMAT 70 O F C 1 2 1 1 2 7 3	2 2 2 1 1 2 2 2 0 2 2	
00120		4 3 1 2 2 5 2 5 3 2 2	
00130	SOKI 68 O F I O 1 1 2 5 8 2	2 2 1 2 1 2 0 1 0 2 2	
00140		5 5 3 5 2 1 2 5 2 5 4	
00150	OYAS 63 O F G 1 1 3 5 3 8 4	2 2 1 2 1 2 1 1 0 1 0	
00160		2 5 4 5 4 4 5 5 4 5 4	
00170	NHIR 48 M M M O 1 2 2 3 7 4	1 1 1 2 1 2 2 2 1 2 1	
00180		5 5 4 2 5 5 2 5 2 5 5	
00190	NTAK 47 M M O O 2 3 1 5 7 3	2 2 1 2 2 2 0 0 0 0 1	
00200		3 3 5 2 3 3 5 3 3 3 3	
00210	MKOO 44 M M N O 3 2 1 2 7 4	2 2 2 2 1 1 2 1 1 2 1	
00220		5 3 2 2 4 3 1 5 3 5 5	
00230	OSHU 44 M M G O 3 2 1 1 3 3	2 2 1 2 1 2 1 1 1 1 1	
00240		4 2 2 2 5 4 4 4 2 2 4	
00250	ITAD 44 M M C O 3 3 2 2 8 3	2 2 1 2 2 2 2 1 1 1 1	
00260		5 5 3 5 5 4 4 5 4 2 4	
00270	ITER 54 M F E O 2 4 2 2 8 3	1 2 1 2 1 2 2 2 1 2 2	
00280		4 5 5 5 5 5 3 4 3 4 5	
00290	ICIE 44 M F D 1 1 1 2 3 7 4	0 2 2 0 2 2 2 2 0 0 2	
00300		1 1 4 3 5 1 1 5 3 1 5	
00310	TMAS 44 M F K O 2 2 3 4 7 4	2 2 2 2 1 2 2 2 2 2 1	
00320		1 5 1 1 5 5 1 5 1 5 5	
00330	THIR 54 M F J O 1 4 3 5 8 3	1 2 1 2 2 2 0 0 0 0 0	
00340		1 1 5 5 5 2 3 4 3 3 3	
00350	NHIS 49 M F O O 1 3 5 3 7 3	0 2 1 2 1 2 2 2 1 1 1	
00360		1 5 5 1 5 5 5 5 3 2 4	
00370	MKAZ 38 M F N 1 5 1 2 5 7 4	2 2 1 2 2 2 1 2 0 2 1	
00380		2 3 4 2 5 4 2 5 2 2 5	
00390	SMAK 35 M F P O 1 2 2 5 3 5	2 2 1 2 2 2 2 2 0 2 2	
00400		1 5 1 1 5 5 5 5 1 1 5	
00410	IKAZ 17 Y M D O 1 4 2 2 9 4	2 2 1 1 2 2 1 2 2 2 1	
00420		5 4 4 5 5 5 2 5 1 1 5	
00430	TACU 17 Y M K O 1 2 2 2 9 4	2 2 1 2 1 2 1 2 2 2 1	
00440		5 2 4 1 5 4 4 5 1 1 5	
00450	HTOS 14 Y M S O 1 2 1 1 9 3	2 2 1 1 2 2 1 1 1 1 1	
00460		4 4 2 1 4 5 4 5 5 2 5	

```
00470 OHID 14 Y M G O 1 4 1 1 9 3    2 2 1 0 2 0 0 0 0 2 0
00480                                4 2 2 2 4 4 3 5 4 2 4
00490 MTOK 14 Y M N O 1 4 2 4 9 3    2 1 2 2 2 1 1 1 0 2 2
00500                                4 3 2 4 2 5 4 4 3 1 4
00510 OHIR 13 Y M H O 1 1 1 1 9 3    2 2 1 2 2 2 0 2 2 0 0
00520                                4 1 5 5 2 5 1 5 1 2 5
00530 TKOO 13 Y M K O 1 3 1 5 9 3    2 2 1 1 2 2 1 1 1 1 1
00540                                1 1 5 1 5 1 1 5 1 1 5
00550 AJUN 13 Y M R O 2 3 1 5 9 3    2 2 1 0 2 2 1 1 2 1 1
00560                                5 1 1 1 5 5 1 5 1 1 5
00570 TSHO 12 Y M Q O 1 3 1 2 9 3    2 2 1 2 2 2 1 2 1 1 1
00580                                2 2 5 4 5 2 1 5 2 2 4
00590 KTAC 14 Y M L O 1 3 2 1 9 3    2 2 2 2 2 2 0 1 1 2 1
00600                                1 3 2 2 2 5 3 3 5 2 5
00610 TCIE 26 Y F J 1 2 1 1 1 1 6    2 2 1 2 2 1 1 2 2 2 2
00620                                1 1 5 5 5 2 2 5 1 2 5
00630 IKIY 17 Y F C O 2 3 2 2 9 4    2 2 1 2 2 2 1 2 2 2 1
00640                                5 1 4 2 4 2 1 5 1 1 5
00650 ITAM 16 Y F F O 1 3 1 3 9 4    2 2 1 2 2 2 0 2 1 2 1
00660                                5 5 4 5 5 5 4 5 4 2 4
00670 SKEI 12 Y F V O 1 3 1 1 9 3    2 2 1 1 2 2 0 2 2 1 1
00680                                2 3 4 2 2 5 2 4 1 2 4
00690 SKAY 12 Y F W O 1 4 1 1 9 3    2 2 1 2 1 2 0 1 0 1 0
00700                                2 4 4 2 2 5 1 5 1 2 1
00710 SMEG 13 Y F X O 3 3 1 5 9 3    2 2 2 2 2 2 1 2 2 1 1
00720                                5 5 4 2 5 2 4 5 1 2 5
00730 YNOR 13 Y F U O 3 4 2 2 9 3    2 2 2 2 2 2 0 2 1 2 1
00740                                2 2 4 2 4 5 2 4 2 1 5
00750 YKAZ 12 Y F T O 1 1 1 2 9 3    2 2 1 2 2 2 1 2 2 1 0
00760                                2 4 4 2 2 4 5 5 1 1 4
```